

10. 冬芽の凍害防止を目的とした秋冬期防寒の最終時期（平成8年）

〔要 約〕

冬芽の凍害を防止するための秋冬期の防寒時期は、平均気温が10℃を恒常的に下回る12月中、下旬まででよい。

〔背景・ねらい〕

冬芽の凍害は、晩秋～初冬期にも発生がみられ、これは一番茶収量の減少や品質低下の一因となっている。

そこで、冬芽の凍害回避法について研究を進め、昨年、秋冬期の防寒時期について技術情報で紹介した。しかし、当情報は平坦内陸部に適用範囲が限られていたので、今回は平均気温による指標を加え、適用範囲をより一般化する。

〔内容・特徴〕

- ① 冬芽の秋冬期における耐凍性は、‘ゆたかみどり’が最も低い品種の一つであるので、この品種は秋冬期防寒の最終時期決定の指標品種として使える（表1）。
- ② 耐凍性は、春期だけでなく晩秋～初冬期にも弱く、厳寒期は強い。また厳寒期では、摘採面気温－8℃程度では被害を受けない（表2）。
- ③ 耐凍性の低い、‘ゆたかみどり’でも、平均気温が10℃を恒常的に下回るようになる12月中、下旬になると、摘採面気温－8～－9℃でも凍害の発生が極めて少なくなる（図1）。

〔活用面・留意点〕

- ① 気温が高く推移し、その直後に初霜を迎える場合に、特に防寒が必要である。
- ② 防霜施設の稼働開始の設定温度は、冬芽の耐凍性の程度にあわせ、初霜期は春期より1℃低く、12月ではさらに2～3℃低くする。
- ③ 春期の防霜は従来通り実施する。
- ④ 参考資料：平成7年度茶業振興対策資料 P42～43

〔具体的データ〕

表1 品種別冬芽の凍害率

(平成7年11月22日：低温処理 -8℃)

品 種	くりたわせ	ゆたかみどり	するがわせ	あさつゆ	やまかい	さやまかおり	やぶきた	かなやみどり	さやまみどり	ふじみどり	おくみどり	おくむさし	やまとみどり
凍害率 (%)	42.2	96.0	25.5	87.9	84.0	3.1	16.5	2.1	23.6	70.4	27.3	73.3	10.5

表2 人工気象器内での経過日数と異なる低温処理での冬芽の凍害率 (%) 'ゆたかみどり'

人工気象器内での経過日数	平成7年1月7日* (低温処理-8℃)		平成7年1月19日* (低温処理-16℃)
	気温7℃区 (A)	気温15℃区 (B)	気温7℃区 (A)
0 日 後	0		14.0
1 日 後	0	0	22.8
3 日 後	0	0	29.1
5 日 後	0	0	27.3
7 日 後			24.0
11 日 後	0	0	

注) *は切り枝をほ場から採取した日で、水さし後次の (A, B) 2条件下の人工気象器内で管理。

気温7℃区 (A) は1日の気温推移が最高12℃、最低2℃、平均7℃、気温15℃区 (B) は最高20℃、最低10℃、平均15℃で共に日長11時間とした。

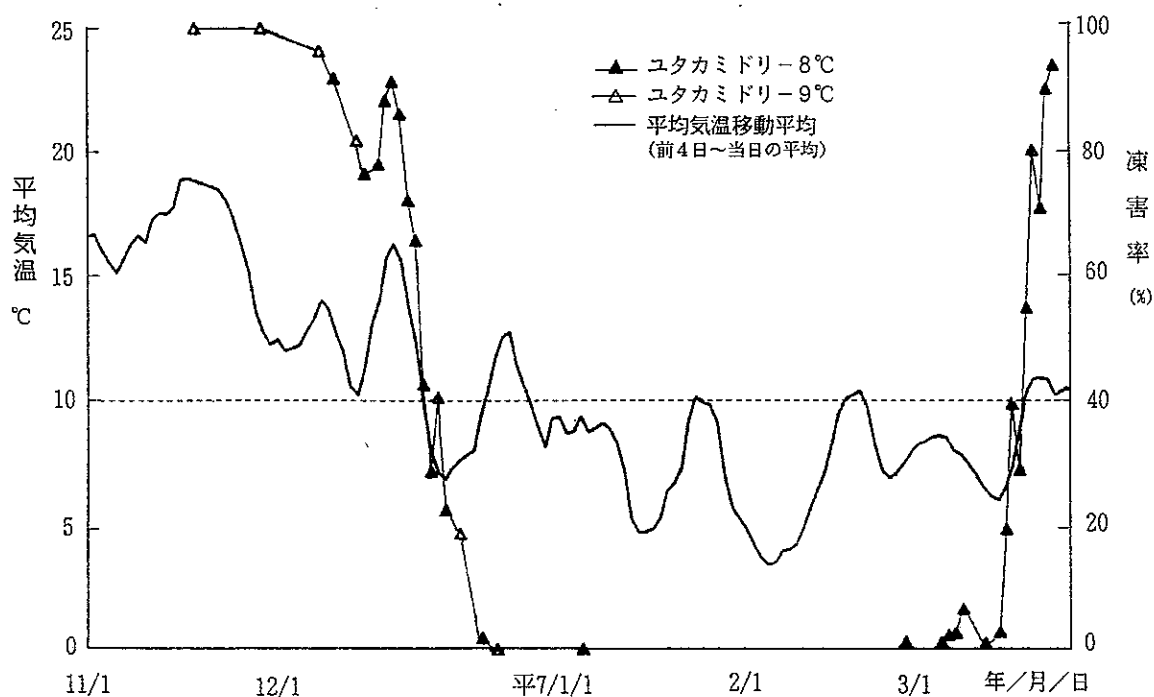


図1 平均気温の5日間移動平均と-8℃の低温処理における凍害発生率